



私は自分のアイデンティティーに誇りを持つている。しかし、これはつい最近のことだ。日本語、ドイツ語、英語、ルーマニア語の4ヶ国語が話せる私はそのおかげでよく褒められてきたが、

## 学校便り 36

# 私のアイデンティティーと日本語学校

ワシントン日本語学校卒業生  
オプリシャン マルヴィナ  
(2017年3月卒業)

ワシントン日本語学校に通うまではコンプレックスでしかなかった。

私はルーマニア生まれルーマニア育ちのルーマニア人だ。ルーマニアのドイツ語幼稚園を卒園し、小学2年までドイツ語の学校に通っていた。その当時、空手をやっており、空手を通して日本語に興味を持ち始めた。独学で勉強しようとしたが、まだ8歳だった私の独学の効率は悪く、そんな私を見た母は全日制のブカレスト日本人学校に入学させてくれた。そして、私はブカレスト日本人学校で小学2年から中学3年までの8年間を過ごすことになった。中学3年にもなると私には日本語だけでなく、日本の文化まで身につけていた。電話をするときも受

話器は両手で持ち、頭を下げながら話している自分がここにいた。

中学を卒業すると、高校は母の仕事の都合でアメリカで通うことになった。しかし、アメリカに来るとみんなに自分をどう紹介するべきかわからなかった。私はルーマニア人に生まれながらルーマニアの教育を受けたことがなく、人生の半分はドイツ人として、そのもう半分は日本人として生きてきた。一言で終わるような自己紹介はできなかった。みんなと違う自分が恥ずかしかった。

しかし、そう迷っていた時期にワシントン日本語学校に通い始めたのだ。様々なアイデンティティーを持つ私が、初めて自分と同じような人たちに出会った場所だ。ハーフの人たちや、日本で育った外国人、アメリカで育った日本人など、複数のアイデンティティー



ブカレスト日本人学校の秋祭りにて小4の頃のマルヴィナさん

を持つていた人たちが多かった。そんな仲間に毎週会えるだけで心の安らぎだった。そして、一緒に時間を過ごすうちに、複数のアイデンティティーを持つていたとしても、その全てが自分であり、一つに絞る必要はないことを学んだ。ワシントン日本語学校は、いろんな人がいること、そしてそれが素晴らしいことであると私に教えてくれたのだ。

私のアイデンティティーへのアプローチを180度変えてくれたワシントン日本語学校に恩返ししたいと思い、今は小学校2年生の授業のお手伝いをボランティアでしている。ボランティアをする中で、生徒としては見ることでできなかった先生方の目線で日本語学校を見ることができた。先生方は授業に工夫を加え、より勉強のしやすい環境を作ってくださっている。その充実した環境のおかげでこそ、生徒たちが広い視野を持つことができるのだと感じた。私がアイデンティティーへの新しいアプローチを取れたのは仲間のおかげだけでなく、心に余裕を与えてくださった先生方のおかげでもあったのだと改めて感謝できたのである。



2015年の運動会にてマルヴィナさん(後列左端)